

嶋田美咲¹・渡辺彩花¹: 報告—第35回日本植生史学会談話会Misaki Shimada¹ and Ayaka Watanabe¹: Report—The 35th forum of the Japanese Association of Historical Botany

2012年11月24日・25日に「佐渡の天然スギ」というテーマで新潟県佐渡島において行われた第35回日本植生史学会談話会に参加した。筆者らは今回が初めての談話会参加であり、さらに佐渡島に足を踏み入れることも初めてであった。まだ研究を始めたばかりの初心者として、今回の談話会を通して得た沢山の感動を述べさせていたいただこうと思う。

まず一つ目の感動は、新潟大学佐渡研究林に向かう途中に立ち寄った名勝、佐渡島北端に位置する大野亀であった。大野亀は、遠く北にロシアを臨む海にそびえ立っている標高167mの一枚岩である。実物を見た後に、看板を見て一枚岩だと知った時は、あまりに大きく立派であったためにその意味がよく理解できなかったものである。大野亀自身とその周辺部は主に枯れた草原で覆われており、当日の透き通るような青い空と草原の乾いた黄土色のもたらすコントラストが大変美しかった。ところで、筆者らはこの風景



図1 大野亀の草原とカシワ疎林 (提供: 能城修一氏).



図2 大佐渡山地中腹で見学 (提供: 佐々木由香氏).



図3 佐渡演習林の天然スギ (提供: 箱崎真隆氏).

を見て昨年個人的に訪れた大分県の由布岳周辺の草原(筆者の1人である渡辺の研究対象地)を思い出した。奇しくも談話会のちょうど一年前に由布岳を訪れた時も天候は大変良く、空の青さと草原の黄色が印象的だったのである。遠い九州の地に思いを馳せていると、由布岳周辺の草原は日本有数の火入れ草原であるが、この大野亀の草原の維持方法はどのようなのだろうかという疑問を抱いた。草原に耐火性があると言われていたカシワの疎林が見られることも共通することから、火入れが行われているのだろうか。この辺り、質問をしておけばよかったと今更ながら後悔している。この大野亀は初夏にトビシマカンゾウが咲き乱れる国内有数の群生地ということであるので、緑溢れる時期にもぜひまた訪れてみたい。

もう一つの感動は、今回の談話会のテーマにもなっている



図4 金剛杉の前での集合写真 (提供：箱崎真隆氏).

る佐渡の天然スギ林についてである。実際に新潟大学佐渡研究林に足を踏み入れると、天然スギの分布が共通していることから、我々にとってはなじみの深い京都大学の芦生のスギ林と比較して観察してしまうことが多かった。佐渡島の生態についてのお話を伺っている中で、芦生と最も異なる印象が強かったのは、佐渡島の天然スギ林がブナを欠いていることである。同じ日本海側多雪地であるのに、スギやミズナラが生育しているのに、スギ林の中にはブナがない。植生史の観点から、このような林分構成に至った経緯を解明することは重要ではないだろうか。今回は雪の積もっている冬に訪れたため木々に葉がほとんど残っておらず、実際自分の足で歩いた印象としてはブナの有無による印象の違いはあまり分からなかったというのが本音である。ぴんと張り詰めた冷たい空気の中、ひっそりと、しかし威厳さえ感じさせる姿で佇んでいたスギの巨木たちを感じるには冬が最適であると思うが、やはり自然の息吹を生き生きと感じられる春や夏の様子も改めて伺いたいところである。また、芦生にはニホンジカやカモシカなどの大型哺乳

類が生息しており、林内を散策していても足跡をよく見かけることがあるが、佐渡では説明の中でもあったように本州から哺乳類が渡ってこれなかったためか、動物の気配を全く感じる事がなかった。鳥類についても、佐渡研究林を歩いている最中に鳴き声をほとんど耳にした覚えがないが、これも島という孤立した環境の特徴なのだろうか。

以上のように、今回の談話会において筆者らは沢山の感動とともにいくつかの疑問を土産として持ち帰った。今後、ぜひまた違う季節に佐渡を訪れ、佐渡の違う一面と巡り合っってこれらの疑問を解消する手掛かりを見つけたいと思う。

最後になりましたが、佐渡島の生態について詳しく説明し案内して下さった新潟大学演習林の本間さん、勝手にわからない状態での参加でご迷惑をおかけしたにも関わらず温かく接して下さった世話人の荒川さんをはじめとして参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。

(〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 京都府立大学森林植生学研究室)